



筆

身 辺 雑 感

大 路 清 嗣*

37年間勤めた大阪大学工学部を平成7年3月末で定年退官し、4月1日より龍谷大学理工学部勤務している。ようやく1年が過ぎようとするところまできた。この間、少し大げさなといえば、いろいろとカルチャーショックを受けながら、徐々に新しい環境に慣れ、それを受け入れ、日々を楽しむ心境になってきた。この1年間を振り返り、いろいろと見聞きし、体験し、感じたことを書き、私の責めを果たしたい。

龍谷大学 — 日本で最も長い歴史をもつ大学 —

龍谷大学は浄土真宗本願寺派(本山 西本願寺)設立の、仏教系総合大学である。文、経済、法、理工、社会の6学部と短期大学部から成っており、平成8年4月には更に国際文化学部が加わる。世間ではもっぱら「お坊さんの大学」として知られ、理工学部までもつ総合大学であることを知っている人は必ずしも多くない。大学の起源は1639年(寛永16年)に創立された本願寺派学寮にまでさかのぼる。文学部がその歴史の直接の継承者である。今年357年の創立記念日を迎え、日本で最も長い伝統を誇る大学である。世界でも最長の歴史をもつ大学の部類に属している。

古い時代には、宗教は科学を含む文化の中心であった。図書館には仏教や歴史・国文学関係の古典籍のほか、医学・化学・薬学(本草学)・天文学・数学・暦学など自然科学関係の1000

点4000冊余の貴重な古典籍が所蔵されている。また、1902年(明治35年)から三次にわたってインドから中央アジアを踏破した大谷探検隊は、わが国の最も古い学術探検隊として著名であるが、そのとき収集された貴重な資料も図書館に収蔵されている。

現在龍谷大学は三つのキャンパスに分かれ存在している。文学部が京都駅近く、西本願寺前の大宮学舎、経済、経営、法の3学部と短期大学部が京都市伏見の深草学舎、そして理工、社会と、この4月からは国際文化が加わって、合計3学部が天津市の瀬田学舎にある。

1960年(昭和35年)までは、龍谷大学は仏教学を中心とした、文学部だけの単科大学であった。1960年に浄土真宗の開祖、親鸞聖人の700回忌記念として深草学舎が設置され、翌年の1961年(昭和36年)4月に経済学部を開設、まず文系総合大学としての道を歩み始めた。その後1966年(昭和41年)に経営学部、1968年(昭和43年)に法学部が開設されている。短期大学部の開設は1950年(昭和25年)であった。

1989年(平成元年)、創立350周年記念事業の一環として、瀬田学舎に理工と社会の2学部を開設、理系学部を加えて、名実ともに総合大学としての基礎を固めた。1996年(平成8年)4月には更に国際文化学部という特徴ある学部を加える。

龍谷大学という名称は本願寺の山号である「龍谷」に由来する。親鸞聖人の廟地「大谷」を漢字にあてた「瀧」(訓はオオタニ)を分ち書きにしたものである。

龍谷大学理工学部

— 小さいこともよいことだ —

私が37年間勤めた大阪大学は、国立大学の



* Kiyotsugu OHJI

1958年京都大学大学院工学研究科博士課程(機械工学専攻)修了
現在、大阪大学名誉教授、龍谷大学理工学部、機械システム工学科、教授、工学博士、材料強度学、破壊力学
TEL 0775-43-7411

中でも最も大きな部類の大学である。私が所属していた工学部は、その大阪大学の中でも最も大きな学部であり、今進行中の大学院重点化の改組に入る直前の平成7年3月末現在で、20学科・2独立専攻・1研究施設、講座・部門数が140弱、教職員数が六、七百位であったろうか。龍谷大学は文系の比重が高い私学であり、学生数は15000程度と多いが、全学で、常勤の教員は376名、職員は248名、合計624名(平成7年10月現在)の規模であり、教職員数では大阪大学工学部と同程度である。

理工学部は、全国的にみて、理工系学部としては小さい部類に属する。数理情報学、電子情報学、機械システム工学、物質化学の4学科から成り、理学と工学、異なる分野の融合を目指した学部・学科構成となっている。理工学部の在学生は約1600名、これに大学院生約170名を加え、学生数は約1770名である。教員総数は約90、事務職員数は8、これに10名程度のパートタイム職員が加わる。

産学共同活動に力を入れており、Ryukoku Extension Center(通称REC)という、産学共同のための窓口となる組織と立派な建物・設備を整え、あらゆる状況での産学共同活動に応じている。地域社会への貢献も重点課題である。

国立大学のように教授・助教授・助手等の職種ごとの定員はなく、定員は講師以上の教員、助手、及び実験・実習助手のおのおのについて定められている。したがって全教員に占める教授の割合は50%を越えている。講師以上の教員は原則として独立しているので、一般に教員は教育・研究の場で身ひとつ、すべてを自分一人で処理しなければならない。大学院の学生を中心に、学生を使ってシステムを作り上げなくては研究は進まない。国立大学に比べ大きなハンディキャップである。使える助手は事実上いない。

研究費も講師以上はすべて平等、それに引受けた学生数に比例した研究費が上乘せされる。国立大学と違って教授であることによる研究上のアドバンテージはほとんどない。

授業負担もまた平等。ノルマは、大学院を含め6コマ。しかし講義だけでなく、実験・実習・

セミナーなどの担当実時間も勘定されるので、それほどきびしくない。会議は結構多い。

学科の事務はパートタイムの事務職員一人で、実に能率よくこなしている。教材の準備は教務課で一定のフォーマットの下、効率よくやってくれる。

小さな所帯であるから、全教職員の顔と名前が一致する。なかなか名前が覚えられない私も、1年近くで80~90%位の人の名前は覚えた。(顔写真入りの全学の教職員のディレクトリーが発行されている。)当然道や廊下で会えば挨拶を交し、話をする。理工会という教職員の親睦会があり、会費を積立て年3回懇親会をやる。

こんなこともあった。昨年4月に新しく赴任した教員は3名であった。新人はまえからいた人の顔と名前をすぐには覚えられないが、まえからいた人は少い新人の顔をすぐ覚える。そこで起ったことは、赴任してからまだ日の浅いある日、私とたまたまエレベータに乗り合せた人が、自己紹介をしながら、「今度おみえになった大路先生ですね…」と挨拶されたことであった。一人だけではない。何人かからである。とにかく目が合えばあまりよく知らない人でも挨拶し、目をそらすことはない。あたたかい雰囲気である。

大組織の大阪大学工学部時代は、教授会で顔を合す教授仲間を除き、教職員の顔も名前も知らないことが多く、道で会っても知らぬ顔のことが多かった。考えてみれば淋しいことである。組織サイズが大きいことにはいろいろの利点があり、「大きいことはよいことだ」と組織の拡張をはかることが多いが、今はつくづく「小さいこともよいことだ」と、ここの生活を楽しんでいる。

美しいキャンパス・心地よい研究室

龍谷大学に移って何が最も印象的かと問われれば、それはキャンパスの美しさ、研究室の快適さである。郊外に新しく開かれ、緑の山にとり囲まれた立地、建物及びその配置の美しさ、キャンパス全体にただようゆとり、そして自転車を含めた車と人の分離、建物から遠くはなれた余裕のある駐車場、雑草の茂っていない手入

れの行き届いた庭。

一步建物の中に入れば、美しく清潔な廊下、教室、研究室、食堂、トイレ。廊下や通路には余分な物がほとんど置かれていない。とにかく手入れが行き届いている。昼間は勿論、授業終了後に教室を含め廊下・トイレ等の掃除が行われる。頼めば研究室の中も掃除し、ごみを捨ててくれる。建物内も禁煙にはなっていないが、それ故廊下にごみ箱と灰皿を兼ねたステンレス製の容器が多数配置され、頻繁にごみ・吸がらの回収が行われる。

建物のガラスは年2回、そして学生の居室、研究室、教室を含め、全室の床のワックスがけが夏と冬の2回行われる。まことに気持がよい。

学生が行儀がよくてよごさないというわけではなく、ごみ箱・灰皿が多数置かれているのでポイ捨てが少く、それにも増して掃除がよく行われ、行き届いているのである。毎朝キャンパス内の落葉の掃除も行われている。

思えば37年間、きたない環境に住んでいたものだ。芝生は手入れが悪く、1年で根絶えて雑草が支配、草ぼうぼう。ごみ・吸がら・空かん・びん等が散ばり、ごみ箱はごみで満杯。植樹は茂りほうだい。至る所不法駐車、自転車・バイクの乗捨て。ごみを散らかす人はいても、片付ける人はいない。

国公立大学も環境整備・美化はよい仕事をするための必要条件と考え、頭を切りかえ、多少研究費を削ってもキャンパスを美しくしてはどうかと思う。こんなに汚なくては安全管理も行き届かず、COEも信用されず、尊敬もされない。

龍谷大学における仏教行事

学生手帳に「本学は教育基本法と学校教育法により、浄土真宗の精神を基盤として、教育を行う大学である。したがって本学は、一切の人間は平等に真実心を与えられているという親鸞精神にもとづいて、そのことを自覚し、真に人間たるにふさわしい世界をひらくことをめざし、深い学識と教養をもって大衆の一員として努力する人間を育成しようとする。」とある。

一般学生がカリキュラム上履習しなければな

らない宗教関連科目は、仏教学(通年・4単位・必修)だけである。

建学の精神の学生・教職員への伝導のために、大学には宗教部が置かれ、種々の行事が催され、また教化のための資料が用意されている。

入学式と卒業式は仏式で行われ、出席者は数珠を持参する。式は、合唱隊の仏教讃歌・聖歌のコーラスの中で、おごそかに進行する。導師の読経などはない。学生は入学時に仏教聖典をもらう。

各キャンパスには礼拝の場が設けられており、各種の宗教行事が行われる。毎朝勤行が行われ、また毎月、深草学舎ではお逮夜法要(親鸞聖人の毎月のご命日前夜(前日)。毎月15日)、大宮学舎ではご命日法要(同毎月のご命日。毎月16日)、瀬田学舎ではご生誕法要(同毎月のご生誕日。毎月21日)が行われ、各学舎ごと、法要の行われる日の第2講時は休講となる。しかし法要に出席する学生はごく僅かである。

このほか親鸞聖人の誕生を祝う全学をあげての宗教行事として、親鸞聖人降誕会(ごうたんえ)法要が5月21日に行われ、あわせこの日を本学の創立記念日と定めている。また秋10月16日に報恩講法要が行われる。親鸞聖人の祥月命日(新暦1月16日)につとまる法要を「報恩講」というが、龍谷大学では大学の前身である「学寮」を創建された良如上人のご命日にこれを行っている。降誕会と報恩講の両日は全日休講となる。

大学はこれらの行事に教職員・学生が参加することを願っているが、参加が強制されることはなく、全く個人の自由にまかされている。

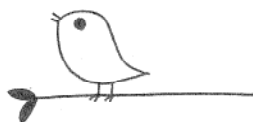
このほか広報活動として、本学で行われた講演会や法話を親しみ易い言葉で表した「りゅうこくブックス」が年4回発行され、学生が自由にとれるよう教室棟の入口等に置かれ、教職員には配布されている。また標語ポスターとして、逆境におかれた人、順境に慣れた人の心に響く言葉、教えが学内各所にはられている。

授業の開始・終了を知らせるチャイムは仏教讃歌のひとつである四弘誓願(しぐぜいがん)(小松清作曲)のメロディーが採用されている。学内すべての人に建学の精神の意義と自覚をう

ながす願いがこめられている。

その気持になれば、学内にはおだやかな宗教的雰囲気十分に満されている。私はこの雰囲気を楽しんでいる。

まだまだ書きたいこともあるが、すでに紙数がつきたので、ここで筆をおく。皆様のご健康と心の平穏をお祈りする。



「訂正」

1996年 新春号 vol.48(No.1)の「夢はバラ色」の執筆者の文中に誤りがありました。次のように訂正してお詫びを申し上げます。

P.70(左) (誤) Eigi
(正) Eiji

(誤) ジョイアール
(正) ジェイアール